

文 部 省 特 選
教育映画祭特別賞
東京都教育映画コンクール銀賞
東京都教育委員会選定
イタリアポポリ映画祭特別賞

白黒 27分 ¥460,000

心動かされる短編 〔週刊朝日評〕

南九州の離れ島を中心に、東北まで百万人の日本人をおかしているという風土病—フィラリア病。その実態と科学的な追求が生々しい現地ロケでとらえられている。

フィラリア病をひき起すフィラリアは蚊が媒介する。島民は「草ぶるい」の発作に苦しめられ長い年月の後には陰惨な象皮病や陰囊水腫になる。しかし彼らは、それでも深い泥田につかり、大島つむぎを織りつづけなければならない。医学調査団が渡ってきて、その実態を明らかにする。小学生まで顕微鏡の下に自分たちの耳からとった血液の中にフィラリアの幼虫を見ることができる。

原因も対策もすべて判る。しかし、その科学をこの島の人びとが「生きる」ために活用できる具体策はない。

学術的な解説を効果的にとりこみながら、いまの日本における「科学と現実」のありようを、痛烈な実写で指摘している。科学はあっても政治がなく、美しい自然はあっても生活は貧しいこの国の姿を、この映画は率直に見つめ、明るみに出している。

風土病との闘い



監 修 厚 生 省
指 導 東京大学伝染病研究所
寄生虫研究部

製作スタッフ

原 作	佐 々 学
製作・脚色	村 山 英 治
演出・撮影	菊 地 周
編 集	田 中 松 子
音 楽	真 鍋 理 一 郎
解 説	宇 野 重 吉

製 作

桜 映 画 社

東京都新宿区西新宿 1-22-1
TEL 03 (342) 5768 〒160

配 給

あ ら す じ

日本の中に、忘れられた日本がある。僻地や離島のつねとして風光はいかにも美しいが、そこには残酷なほどきびしい生活がとざされている。

経済的な貧しさだけでなく、そこには僻地の不幸を象徴するような風土病が今も変わらず、土地の人々はその原因を知るすべもなく半ばあきらめ、病気と共に生きている。このような風土病は都会や恵まれた農村には見られないものである。

しかし、こうした僻地にもようやく科学の光が僅かながらもたらされるようになった。いま東京から来た風土病の研究者たちが、小舟に乗りかえて離れ小島に向った。

区長さんがホラ貝を吹くと、東京から医者が来たというので人々は仕事をやめて集ってくる。十二指腸虫、糞線虫、フィラリアなど、まるで風土病の巣だが、このへんは暖地でとくにフィラリア病が目につく。

フィラリア病は初期に「草ぶるい」と呼ばれる熱の発作がしばしば起きると、末期症状は足が象のように太くなる象皮病、キンタマがスイカのように大きくなる陰嚢水腫、尿が白濁してつまる乳糜症など悲惨な症状を呈する。

しかも彼らは働かなければならない。太い足で工賃の少いハタを織り、収穫の少い段々畑や湿田でえいえいと働いている。研究者たちが訪ねた陰嚢水腫で家族から離れて一人山小屋に住むお爺さんも、キンタマはどうでもよいが何んとか働けるようにならないものかと、訴えていた。

フィラリアを媒介するのは蚊である。これらの土地で蚊を採集して、解剖して見ると、フィラリアの子虫がかなり大きく成長して口管まで出てきているものを容易に見ることができる。こういう蚊に刺されると、その子虫は人間の体内に侵入してリンパ管やリンパ線に巣喰って親虫に成長する。これがだんだん溜ると数十匹ももつれ合っている。親虫は長さ十センチ位もあり、オスとメスがいて、マイクロフィラリアと呼ばれる子虫を無数に生み出す。マイクロフィラリアはそのままだ体内では成長できない。媒介蚊が人を刺すと血といっしょに蚊の体内に入って、約二週間かかって成長して、これが人体に戻ると親虫になって巣喰うようになる。

不思議なことに保虫者の血液の中にマイクロフィラリアが出てくるのは、媒介蚊の出勤する夜間にかぎられている。だから保虫者であるかどうか血を調べるには、夜間に住民を一人



残らず集めて行わなければならない。幸い早く発見してなおすのに最近では非常によく効く薬も出来たし、媒介蚊をなくす殺虫剤の研究も進んでいる。フィラリア病に関する限りは、その対策の研究は既に一段落しているのだ。必要なのは学者たちの研究の成果を生かすことである。

研究者たちは、しばしば僻地に出掛けてゆく。そして、限られた土地ではあるが、住民を集めて一斉に採血した夥しい小さなガラス板を翌日宿屋で染色して一枚々々顕微鏡で調べたり、媒介蚊をなくすために殺虫剤の使用方を実地にやって見せたりする。

また、小学校では保虫者の子供たちに薬を飲ませたと十五分後に採血して、顕微鏡で子供たちにのぞかせた。薬の作用で虫は苦しまぎれに昼間でも血管の中に出てくるので、子供たちは血球の中にうごめいているマイクロフィラリアを自分の眼で発見する。研究者たちはフィラリア対策が一日も早く実践にうつされるように願って、子供たちにフィラリアの実態を教える。

無惨な末期症状になってしまった老人は、体の組織が破かいされているので現代の医学では治りにくいだが、子供たちや、「草ぶるい」の若者たちは完全に救えるのである。

そのとき一軒の家にお産があった。七日祝いには、東京の研究者たちも招かれた。しかし、この無垢な赤ちゃんも、将来陰嚢水腫や象皮病にかからないという保証はないのである。対策の実施はこれからだ、まだそれが始っていないのが日本の僻地、離島の現実なのである。

用 途 高 校 生 物 ・ 保 健 衛 生
成 人 一 般 教 養
